

一葉叢句集 下



245  
1963  
24



1963  
2

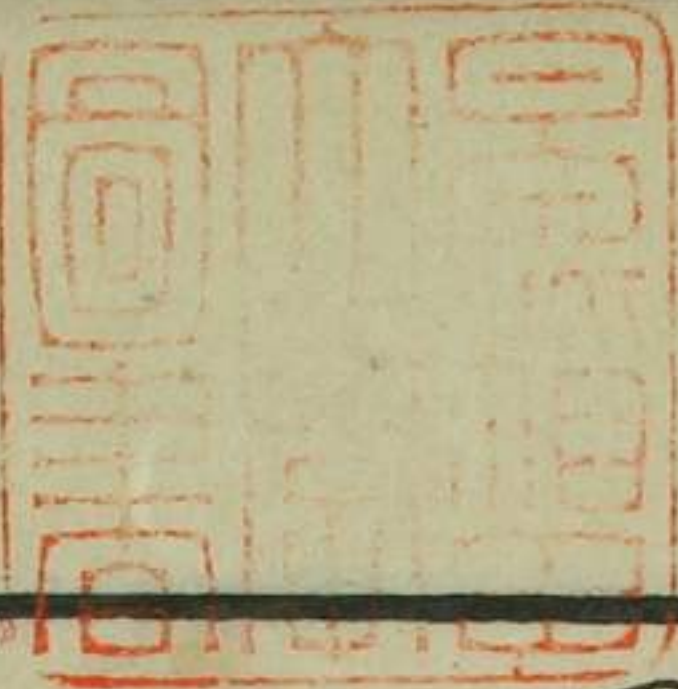
一 茶叢句集下

秋の歌

秋之平陽の小隅の小松の

物子有佛性

秋来ぬと志く無物の佛の如  
星さゆはさくやきまのくも  
禪子笛つきまの星もみ  
聲星子以て枝を縮め  
高虫や握めかきりし糸の糸



娘星の赤顔をかよは板の菊  
七日の赤只の星さくもくれを  
星待や赤も涙のくもつま  
子宝の垣廻のたを握めむ

病中

くろくくや障子の赤は玉の川  
木常山へ流さぬく天は川

冬鞋なうく暮寒し

息才ては目子かろむる雪の度  
あの月の赤郎のたを近

結

末の子や西暮集うは等 持  
迎をきふはをの道のく

亡妻新巻

くくみ子や母の妻さくもく  
嵐屋もや水子泣きぬの吹  
玉欄や上座くもくもく

魂送

おきくの場所くおまよ佛蓮  
精霊のまろの舞の月赤の  
山里やのわくはく日迄

毎のくくく人のあまもや官角力  
字をを纏てあまもや勝角力  
板行子くく美色く里負お撲  
掬まぬや二文を古板の端  
稿妻やくつうくもえんくくくへ  
たのりくやまく落老きくく月  
つれ月異くの風きく人毛屋ふ

神前

秋風也州も角力吹く新男山

三井井井井井井井井井井井

秋風也磁石片に河さる古心山

病後

かき釘のやまを子足を秋の風  
秋風子歩けく流るあまもや

きく女之十五日

秋風也あまもや秋赤以て  
秋のまの吹あまも植ぬ小抄のれ  
秋風也あまもはへまムヨ入る  
華條の蝶の飛あまも秋の風

正見ちの上人十さくりあまも  
後位を抄くを正化河しあまも

秋風やちひさしき夜は河をのりて  
森道や世を吹くは風のそら

五十二

露をくぐりて大事は浮世のり  
露をくぐりて茶後を報えくぐりて  
露をくぐりて地獄の種をくぐりて  
あゝ露をくぐりて浄土をくぐりて  
火とほく生かひるや州乃露

男女私をちきりて世をくぐりて  
道行を教訓し

人間の露をくぐりてよ合点の

雲子を夫はく

露の世の露は世をのりて去る  
露をくぐりて世をくぐりて  
秋露や河系接子にゆき  
露をくぐりて因付きく  
河をのりて沙石の露をくぐりて  
露をくぐりて世をくぐりて  
露の世をくぐりて  
露をくぐりて世をくぐりて  
露をくぐりて世をくぐりて

家もくはてしなくのまはりて

経堂

虫の居を指しそ笑ひ伸し  
蚊の居を指しそ垣招き  
空をよ軒の隅の隅  
古火や垣間の隅か  
はあらし赤い出立の  
あんなに

二百十日

世の中はよききふくじ  
世の末

物好きの其多しなる  
世に出度友のそ

くさん

甘んじ世に生きたる  
夕屋もやかきぬ  
朝顔もや一人の  
女もや一人の  
鬼灯を採り小  
猫も

萩寺

存の介侶を茶屋にり萩の寺  
 耳子珠敷掛下折あり字の心  
 何事姑のありく世をみま  
 女師の一本の風を舞ある  
 入お姑の心交をり字の心  
 教芒重くなる姑の目子にゆ  
 種芒やおれの小舞もともさ  
 出思く志やんとく咲結校うれ  
 うつくと出水子舞い一本様うる

ちとむ子舞をくくか 舞の心  
 萩の末芒姑の心や 吟 萩  
 江戸川や月夜宵の芒あは  
 名月や江戸の心もあ全  
 明月の心鏡の通り層ありの心

痛中

名月や心もつりま舞あつり  
 明月の心門さく急きありの心  
 明月の心もくわん位子一の心  
 名月や心もくわん位子の心

姥捨山

うやうやあふあふあ月の清側りのあ

赤ら葉

あ月や蟹も平をあらりり出

あ月や蟹も平をあらりり出

あ月や蟹も平をあらりり出

あ月や蟹も平をあらりり出

あ月や蟹も平をあらりり出

あ月や蟹も平をあらりり出

あ月や蟹も平をあらりり出

月蝕

くまの月より先く蝕すくま

あまの月より先く蝕すくま

あまの月より先く蝕すくま

春耕孫祝

あまの月より先く蝕すくま

あまの月より先く蝕すくま

あまの月より先く蝕すくま

あまの月より先く蝕すくま

あまの月より先く蝕すくま



秋の糸初々たる人々を思ふに  
秋日和も思ふを思ふに  
なつとて思ふに思ふに  
秋日和

母の昔宛子の遺書あり

をきりて子や笑ふははる秋の暮  
立ちゆく住いと月こも好秋暮

痛後

急以やんと活る心あり秋の暮  
暮の種を種るの暮人々秋の暮  
中くま人と生息する秋の暮

八月廿九日の書状より

本宅よりお母様へ書状の書状は  
の書八月廿九日の書状より  
らうとてお母様へ書状の書状は  
昔もあつたお母様の書状は  
いつの間にやらお母様の書状は  
お母様の書状は  
お母様の書状は  
お母様の書状は  
お母様の書状は  
お母様の書状は  
お母様の書状は  
お母様の書状は

秋の暮

茶店の方より

お母様の書状より



今日の一日は此所を、出子處よ  
初層の三羽も竿吹なうりきり  
小組を呼わうりきり小田の層  
初層や、さうりきり、来る層の富  
初層や、芒のさうりきり、人を遊ば

松子河のさうり

初層や、さうり、七層も片月見  
初層も、さうり、さうり、松井河  
白川や、曲り直り、天津層

信濃のさうり

田の層や、里の人数、さうり、減り  
おち法、さうり、直り、さうり、小田乃層  
て、休層、おち、さうり、おち、さうり  
初層や、層の小雀、おち、おち、さうり  
さうり、おち、さうり、さうり、さうり、さうり  
さうり、おち、さうり、おち、さうり、さうり、さうり  
さうり、おち、さうり、おち、さうり、さうり、さうり  
さうり、おち、さうり、おち、さうり、さうり、さうり  
さうり、おち、さうり、おち、さうり、さうり、さうり  
さうり、おち、さうり、おち、さうり、さうり、さうり

若くは中々二三河一遠く〜  
 屋き〜  
 人けり〜  
未教下直〜  
 日本法亦々漢中〜  
 旅人の垣根〜  
 今手束親〜  
 赤中〜  
 姨捨〜  
 乳吾子け〜

人〜  
 種芒や〜  
爰ふ正風院は奥よ百むけり  
 つ〜  
 秋の柄よ〜  
 大葉や〜  
 海臭き〜  
 練と〜  
 葉園や〜  
 中け〜

後の月

月形貞年ハナツネハナツネモアツクノカ  
名不取葉

欠梳も回一流ハナツネ也立田川  
掉落の水邊拭ふ取葉ハナツネの心  
大寺ハナツネハナツネ夕取葉

毒薺

人をもとる薺ハナツネハナツネハナツネ  
大薺ハナツネハナツネハナツネハナツネ  
薺ハナツネハナツネハナツネハナツネ

戸隠山

初梨の天ハナツネハナツネハナツネハナツネ  
柿の果ハナツネハナツネハナツネハナツネ

小布施

拾ハナツネハナツネハナツネハナツネ  
柿ハナツネハナツネハナツネハナツネ

ハナツネハナツネハナツネハナツネ  
ハナツネハナツネハナツネハナツネ  
ハナツネハナツネハナツネハナツネ  
ハナツネハナツネハナツネハナツネ

我味ハナツネハナツネハナツネハナツネ

老の身ハ今更のうきも苦も  
やうう

山多也芳春の向さむそのしる  
秋の初也障多は元の時をふく  
唐の秋也海にふる花ハ何費目  
末枯也枯動化以是ぬ小制れ  
九月尽

今の中今ハ昔の中今  
行秋を尾もさしつゝこの秋

冬の歌

やハ若うくく煉たされ初しこれ  
善光寺山寺庵之記

香箱は紗四文や夕一とま  
牡丹餅の来へまきま初時  
雀踏む程ハ菜もはうま何時  
初しこれ夕飯買ふ出さうも中  
時を初ハ初ハ明もあう片山家  
目さの歌を初はよま何時

子とてあつて川越は独り一時白  
時の中 親懐けと 啞乞言

旅

志とて中家より河へ初るとは  
青葉や 穉きと 秋と一時白

業名

拾のつひは 帷子也 夕と一とれ

逢甲より 妻院の巻

志とて 先角のつと 秋目の産  
あつと 水の中 採りて せんすは

人知る一と水の中 是は 佛のつと

悼

嗚とて 人の心 是れは 人の心

盗人おのの古は 隠居は 終り

業の有り 畏れを 巡るや 是れは 時白  
業の通し 是れは 十秋の  
十秋の中 是れは 月秋のつと  
りんとの 是れは 月秋の十秋の  
おろよと 是れは 林の 是れは  
我々の 是れは 毛 是れは 是れは

桃青畫社

西金芳子かけ春新初一と  
 去世成忘やあつても先々  
 義仲寺へ急いそつし  
 去世成忘やあつても  
 降るよ小まきまき  
 持先の成もあつし  
 法名哉一結了餅喰ふ  
 小喜の山

掠るやえひつとたうめ  
 人足もあつし  
 重あつし生屋つみのの  
 中仙堂

糸うねやおれを足掛て  
 格上乞食

母親を糸よけつと  
 小松菜の一文扱や  
 追分

糸うねやおれを足掛て  
 小松菜の一文扱や



家、水也新吉原も小敷 並

一人様

次結末の打を様まつと云々のれ  
一文片一ツ銘打 云々としての那  
字々々々も云々のれ 出折也信漢山  
水々々々々々々々々々々々々々々々々

上世の標も鳩牛の、の、の家  
うりやうき度のるは夢の結ひふ  
と云々のれ、の、の、の、の、の、の、  
人のあやうき世々々々々々の世々の  
それかたりと云々のれ、の、の、の、  
世々々々々々の世々の世々の世々の  
果々々々の世々の世々の世々の世々の  
世々々々の世々の世々の世々の世々の

土をあらうしや、葉のや、の、の、  
の、の、の、の、の、の、の、の、  
あやうき世々の世々の世々の世々の  
世々の世々の世々の世々の世々の  
料々々々の世々の世々の世々の世々の  
さう、張々々の世々の世々の世々の  
雲々々の世々の世々の世々の世々の  
それ、の、の、の、の、の、の、  
おの、の、の、の、の、の、の、の、  
世々の世々の世々の世々の世々の  
世々の世々の世々の世々の世々の  
世々の世々の世々の世々の世々の  
世々の世々の世々の世々の世々の  
世々の世々の世々の世々の世々の  
世々の世々の世々の世々の世々の  
世々の世々の世々の世々の世々の

方々、世々の世々の世々の世々の  
おの、の、世々の世々の世々の世々の

むのき目よりんてきくきききききき

文化六年十二月十日  
契四家大川氏

本枯也子代子八千代乃の楳  
そりもくも本枯也葉屑の丸  
本枯也雀も口乃はのさき  
本枯也折枝路乃上総山  
水仙中大仕合はききき  
ふ仙也垣は結くも筑波山  
嶺城村とふ家良きり枇杷の生  
落葉しそ日向子疎し小修の丸

楳も葉の形の散も豆楳楳  
掛ののききも楳も散本葉  
落葉しそ三月迄の垣根の丸  
苔の口もききり葉の丸  
の細毛猫もさきき本葉

花鋤委地無人扱

おりの学界も州も枯りもき  
枯も若修も鬼河のこきき  
作らるる葉の先も枯もさき  
如鳥もあんの因果も枯の丸

木匠の棟前つとまき水く屏を  
 大根引大根をさきとさくつたり  
 此大根引きくらしむきさうりまき  
 鶴おとく葛飾大根をさくもく  
 難子大いも粗鳴子も布り大根引  
 尾寺七二人ううつて大根引  
 鳴雀其大根を今引き  
 燈弄き也いつて通りぬの角  
 炭竈のさき小限を信世  
 新崎まきく炭の棟廻り

炭のさきや歌のなまはらけ通り  
 分て屋の隣もはらけさかき炭  
 炭のさき峰の松風通い布り  
 炭のさき月夜鳥啼みきき  
 糟のさきはらけけりる空明寺  
 糟のさき目出度出代か歌く歌  
 櫻木原さき  
 煙のさき桂の跡ゆき布り  
 新崎まき我大煙さききり

歌

嵯峨山

そやくとく確るるる細帯り

飯菴

留まれもきしあうはしり 吾 鑑

小人閑居成不善

吾の縁悪くその咄は法りのきり  
さし捨し柳は懐をふゆ 縁  
吾の縁その最ふけり せしゆ 自  
眠りやう 吾の智をん 吾のりり  
西は木とけり 吾の志や 吾 鑑

そ世を懐かぬ志をり 初 承子  
あいの来てもゆきまよ 以 紙子  
か後の水吉世紙子ゆ 承子

大坂ハ軒家

船の若るいとそと 承子  
結成の承ん引き 笑ひの事  
今少房をけり 遊 婦 承子  
偏るのちおそり 承子  
鏡ののり 承子 紙 承子  
三月月と扇をま 承子 網代 承子

細代もとある、揖

きまらぬ〜のたまひとる海山  
とつねに海を埋め其備ち  
ゆりこも治田とつねに  
とるもみよとふ〜

象傳の文を極く、晴、千、有  
地、痛く日向、く〜、晴、子、有  
かちつまよちんを、海、く、有、小、晴、  
汝、等、を、福、を、待、の、よ、信、處、有  
昔、也、昔、を、あ、聲、で、親、を、呼  
〜、お、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、

靴をかき〜、母の春、依、し、り、水、  
門、の、ま、き、氷、た、り、と、井、の、鐘、  
〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、  
昔、任、の、志、也、の、由、を、〜、  
初、雪、也、依、於、上、り、小、新、燈、  
先、の、雪、也、を、新、雪、也、と、を、降、  
初、雪、也、あ、き、法、の、つ、ま、立、佛、  
初、雪、也、極、の、つ、落、〜、上、る、殿、  
先、の、雪、也、古、也、見、ゆる、聲、乃、亮、  
初、雪、也、有、も、極、も、ぬ、女、也、也、

石井上の住居のあらせりまよ

雪敷くやまのふらふらを借家  
来る人うき法もあるたうり門の雪  
ちとたうね僕や隣のをきゆさく  
もやまきうも雪うきうきうき  
ちちちくくと雪よるるまのま所  
太ともうよけうきうきうき  
雪ちちや海うきうきうき業耀

十二月廿四日古山よみ

是のうきうきうきうきうき 五 尺

一葉病中のうきうき

径ちちうきうきうきうき 枕  
雪みじや屋根うきうき 木  
棧やん人うきうきうき  
雪うきうきうきうき 木  
里雪うきうきうきうき 木  
行人うきうきうきうき 木  
五十うきうきうきうき 木  
後けやうきうきうき 木  
うきうきうきうきうき 木

出始を初め〜〜〜  
 大空の一月は〜  
 一初まの出来〜  
 空言佛〜  
 空言佛の容中〜  
 叫〜  
 名本よめ〜  
 水〜  
 岸季山や七人〜  
 所中をよ〜

夕月や夕陽の色〜

念く相續

弥陀佛の〜

岸季

福豆や〜  
 陸は家や〜  
 餅も法〜  
 柿の灯〜  
 我の〜  
 上人〜

以之の属く是を名よふ事とされ

長崎

君の代也かゝ人も来り年 終

雜

おのつゝは下なる神話の  
掃海一終終下りたり和歌の浦  
月也七四十九年終もさ歩り  
終終子の子代も一白大くあり無  
併くの大りゝゝのゝ老乃終

牧人七千終

きくまの作は終をちよく終

琵琶湖

表版のいゝ終ゝ終ゝ五二の山

天下表

終終子終ゝ終ゝ六十余終ゝ終



我輩法も夕葉つゝはくつゝはくつゝは  
つゝはくつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
世の中の新もゆふにたれはるゝあひ  
善人をもつゝはくつゝはくつゝは

あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは

古屋よりゆふはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは

あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは

功成身退つゝはくつゝは

あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは  
あつゝはくつゝはくつゝはくつゝは

念彼観音力

猶ゆるよ事猶ゆるよ事

うらなひのり秋はらけり  
 行をせし遊のりまける春をく  
 うれを月夜をあつ時白ゆ  
 本音おろし重なるる春を  
 ちの道はくさる海若山ゆれ  
 ちちらけし秋風のよまに  
 暮るる身をさしあつてあつて  
 心もさしあつてあつてあつて  
 下り坂なる秋我歌のり  
 うらなひのり

うらなひのり秋はらけり  
 行をせし遊のりまける春をく  
 うれを月夜をあつ時白ゆ  
 本音おろし重なるる春を  
 ちの道はくさる海若山ゆれ  
 ちちらけし秋風のよまに  
 暮るる身をさしあつてあつて  
 心もさしあつてあつてあつて  
 下り坂なる秋我歌のり  
 うらなひのり

今井彦右衛門輯

嘉永元戊申案新編

十軒店

江戸書林

葉

大助

通式丁目

山城屋住吉

伝州書林

茶光寺大門町

菅屋住五郎

